

中国のほんの話(22)

新聞王国・中国

蔭山 達弥

中国人は新聞を読むのが大好きだ。それは中国で発行されている新聞の種類と部数の桁外れの多さを見ても明らかである。8月4日付の産経新聞国際面によると、中国全土で発行されている新聞・雑誌は10,000種類以上、中央と地方の党・政府機関が発行する新聞で2,000種類以上あるとみられている。中国の新聞は文化大革命期間中(1966～1976)にはわずかに42種類しかなかったが、1978年には186種類、1998年には2,053種類と20年間で10倍に増えた。

中国では街角やバス停の近くに個人経営の‘報刊亭’(新聞・雑誌の売店)があり、夜遅くまで営業している。新聞・雑誌は最寄りの郵便局で定期購読を申し込めば、自宅まで配達してくれるが、団地やアパートでは他人のポストから勝手に新聞を盗む不心得者がいるので、売店で直接購入して読む人が多い。『北京晩報』などの人気のある夕刊紙は日が暮れる頃には売り切れてしまうこともしばしばだ。とにかく、バスや地下鉄の車内で老若男女を問わず、新聞を読んでいる人の多さには驚嘆する。

アメリカのNew York Times、イギリスのThe Times、フランスのLe Mondeに相当する中国の新聞は『人民日報』であるが、孫燕君の『報業中国』(中国三峡出版社、2002)によると、『人民日報』は中国の新聞・雑誌の広告収入の100位以内に入るものの、なんと91位である。ちなみに広告収入第1位は『広州日報』、第2位は『北京青年報』、第3位は上海の夕刊紙『新民晩報』である。実際『人民日報』は売店でもほとんどお目にかからない。理由は一つ、無味乾燥な評論・論文ばかりで誰も読まないからである。しかし、首都北京での『人民日報』の発行部数は202万部で、老舗の人気夕刊紙『北京晩報』(100万部)の2倍もある。『人民日報』の方が部数の多いのは政府機関や学

校・企業などの団体が組織的に、半ば強制的に購読しているからである。だから、職場に行けば『人民日報』などの党・政府の機関紙は読めるのである。

さて、中国の政治・文化の中心である首都・北京で圧倒的な支持を得ているのが『北京晩報』、『北京青年報』の二つである。そしてこの二つの新聞に「追いつき、追い越せ」と後発の『北京晨报』(1998年7月創刊)、『北京娛樂信報』(2000年10月創刊)、『京華時報』(2001年1月創刊)の三つを合わせたトップ5が互いにしのぎを削っている。この五紙に共通する点は情報中心の都市型新聞であるということだ。大きさは普通版の『北京青年報』、『北京晨报』、他の三紙はタブロイド版である。日本の新聞と同じように多色刷りで、『北京青年報』のように全ページカラーのものもある。そして特筆に値するのはページ数の多さである。『北京晨报』の16ページを除くと、平日は32ないし40ページ以上、『北京晩報』などは最近では60ページが普通である。都市生活者の収入の増加、富裕層の出現により、自動車・コンピュータ・電化製品・化粧品などの全面広告が目立つようになってきた。『北京青年報』のマンションの広告を含む木曜の不動産特集は16ページもある。

世界の百年余りの新聞の歴史で、業界は過去二度の衝撃を受けた。一度はラジオ、二度目はテレビである。だが二度の衝撃は新聞業界を衰亡させることはできなかった。しかし、インターネットのもたらした第三の衝撃に印刷を媒体とした新聞は立ち向かえるのか。中国も例外ではない。2000年1月、中国のインターネット利用者はわずか890万人だったが、半年後には1,000万人を突破し、利用者は驚くべきスピードで増えている。中国最大の政府筋のニュース社である新華社は1997年11月7日、『新華網』を打ち立て、一日にクリックされる率は1,000万人を超えている。中国の業界も、2000年3月『北京日報』、『北京晩報』など9社が共同で『千龍新聞網』を組織したほか、現在では国内の新聞の約半数がインターネットを利用できるようになっている。

かげやま たつや(助教授・中国文学)